

変化咲アサガオ（采咲系）の 出物選抜手順について

名和田 潔

当園で系統保存している変化咲アサガオのうち、采咲牡丹（花弁が二重、三重に細く切れて咲く）が出る一系統について、葉型による出物（観賞価値の高い本格的な変化咲）選抜手順を報告する。

1. 供試系統

国立遺伝学研究所（三島市）から譲り受けたNo.13の3代目の種子を供試した。

2. 耕種概要

平成2年5月9日に種子まきをした。まず種子を芽切りした後、湿らせた脱脂綿に置き、5～6時間吸水させた。育苗パットにはパーミキュライトを7分目ほど入れ、たっぷり灌水した後、ピンセットで1粒ずつ種子をつまみながら45°の角度に置いて（図1）、まき土を約5mm覆土した。

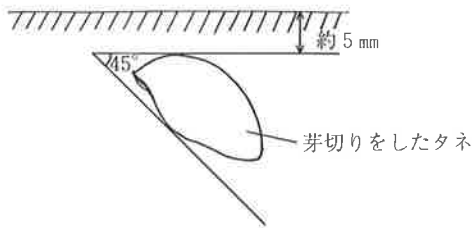


図1. タネのまき方



発芽

播種後、ガラス温室で管理した。4～5日目に発芽が始まり、子葉が展開したものから順次2.5号ポリポットに鉢上げした。鉢上げした後2～3日たった夕方から屋外に出して管理した。

その後、本葉4～5枚時に出物、親木（種子とり用）と思われる苗を5号駄温鉢に定植し、追肥や農薬散布等を適宜行った結果、8月中旬より開花した。

3. 結果

一般的な出物作出手順を図2に示す。この図における、子葉、本葉の段階での葉型による選抜手順を以下に示す。

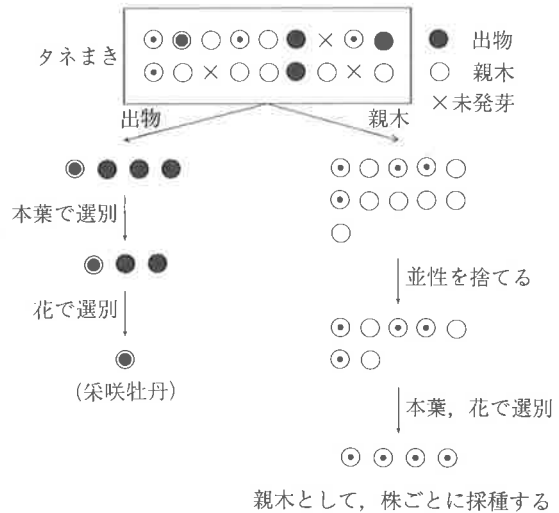


図2. 一般的な出物の作出手順

まず子葉展開時に、以下の3つのタイプに大きく区分した。

- (1) 並性の子葉で、普通に見られるアサガオとほぼ同じタイプ（図3）
- (2) (1)と葉型は似ているが、葉縁が波打つタイプ（図4）
- (3) 上記2つのタイプとは明らかに形が異なり、一見して変化咲アサガオと呼べそうなタイプ（図5）

このように区分した(3)のタイプは出物苗、(2)のタイプは親木苗として取り扱い、(1)のタイプは処分した。出物苗は簡単に見分けがつくが、親木苗の選抜この段階では難しいので、可能性のあるものはなるべく残しておく方がよい。

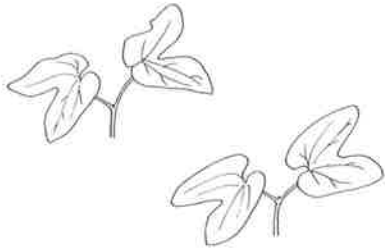


図3

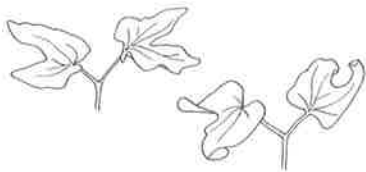


図4

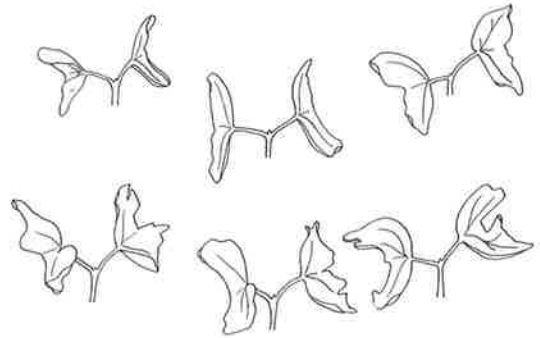


図5

その後、本葉4～5枚になり、将来の葉型がはっきりしたところで、あらためて親木苗の選抜を行った。当園では、采咲系の親木として、本葉の切込みが深く、縁がやや上に抱え、細形のタイプ(図6)を選んでいる。この段階で、(3)の出物苗の本葉は、柳のような細い葉、それがよじれたようなものであった。(図7)

播種後、3か月目くらいから花が付き始めた。(3)のタイプから撫子咲、撫子采咲牡丹が出た。

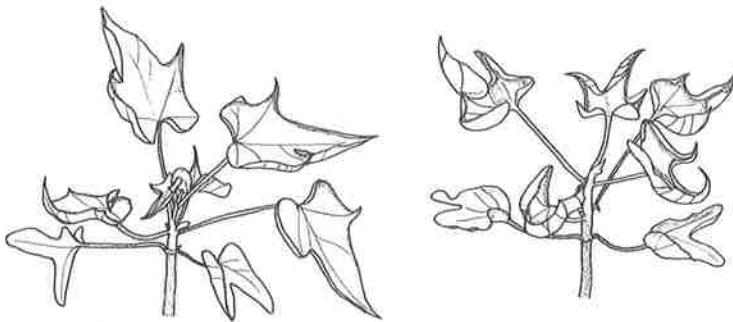


図6. 親木として扱った苗



撫子采咲牡丹

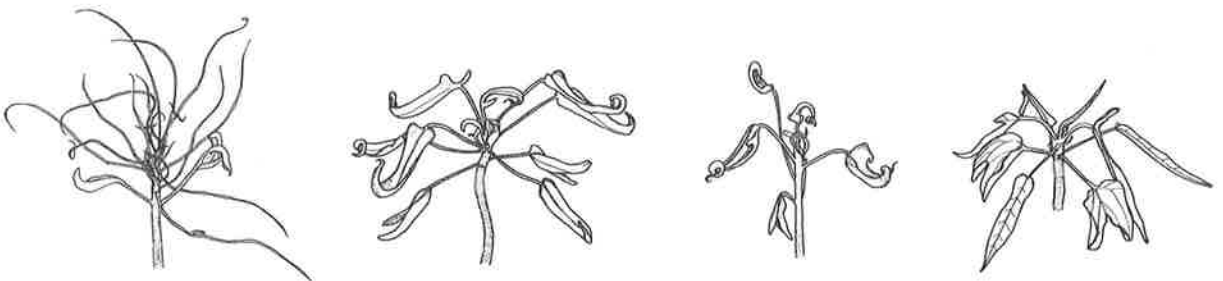


図7. 出物として扱った苗